心ゆたかに

第３５号　発行日　平成１３年９月１日

発行　株式会社天峰建設　袋井市横井 115-3
TEL 0538-43-6773　FAX 0538-43-7250
ホームページ　http://www.tenpou.co.jp/
Eメール　tenpou@mail.wbs.ne.jp

匠の技を守り伝える

持田武夫氏　勲五等双光旭日章受章

H13. 7. 15.　持田武夫氏 勲五等双光旭日章記念講演会・祝賀会。ルビノ京都

去る七月十五日、京都府のホテル「ルビノ京都」において、持田武夫氏の勲五等双光旭日章受章の祝賀パーティーが、日本伝統建築技術保存会（今年一月発行の第三十一号「心ゆたかに」で簡単に既述）の主催で行われました。また当日は受章記念講演会「規矩術雑談」も行われ、氏の豊かな実績に裏打ちされた講演に、「伝統技術を守り伝えたい」という同じ志を持つ大勢の参加者は、共感しながら真剣に聞き入っていました。天峰建設社長の澤元も同会の会員として今回の祝賀会と講演会に参加して参りました。

持田氏は日本伝統建築技術保存会の特別会員でもあり、平成十三年度春の叙勲で今回の勲五等双光旭日章を受章されました。島根県生まれで、姫路城国宝保存工事事務所を経て、筥崎宮本殿（重要文化財）、酒垂神社本殿（同）、八幡神社本殿及び拝殿（同）、燈明寺本堂（同）などの数々の工事を担当されてきました。昭和四十九年度主任技術者講習会上級コースを修了され、平成五年には文化財選定保存技術規矩術（近世規矩）の保持者として認定されました。平成十年に建築学会賞を受賞された他昨年は文化財保護法五十周年記念功労賞など数々の賞を受賞されています。

日本伝統建築技術保存協会には、今回の持田氏以外にも各界のそうそうたる方々が名を連ねておられ、総会や講演会、懇親会、見学研修会などを通して伝統建築が直面している課題を知り、それに対する助言を聞いたり意見を交換するばかりではなく、会員同士の技術や知識の情報交換ができて磋琢磨が図れます。特に同会が主催する見学研修会では普段見られない国宝や重要文化財の解体修理も見学でき、詳しい解説を聞けるため、若手の技術者はぜひ参加するべきだと思います。

天峰建設としても地域の皆様に貢献するために、この様な活動には積極的に参加し、より一層技術に磨きをかけて行きたいと思います。

規矩術（きくじゅつ）とは

指矩（さしがね）を用いてあらゆる建築の寸法を求める技術。直角三角形の相似比や平方根等を巧みに応用している。

宗教法人のペイオフ対策

日本テンプルヴァン㈱　井上文夫

今回から話題を変えまして、「宗教法人にとってのペイオフ対策」についてお話をさせていただきます。「ペイオフ」について何もご存知ないという方はいないと思われますので、基本的な説明は紙面の都合で省かせていただきます。金融機関が破綻した場合、定期預金は平成十四年の四月以降、元金一千万円までとその利息まで、普通預金は平成十五年四月以降、同様の保証しかされないということが主な骨子です。

そこでお寺にとり、虎の子とも言える貴重な浄財を如何に保全し、さらにはちょっとした知識を持てば、それを如何に上手く増やしていくことができるかなどにつきましてお話をさせていただきます。

（一）厳しさ増す寺院経済

地方、とりわけ都市部を除いた地域ではまだお寺と檀家との本来の関係が保たれておりますが、都会などのお寺と檀信徒との間の関係は、想像以上に希薄なものになってきているのは、ある程度ご存知の通りであります。そうした状況では、年回法要の減少にはじまり収入減に直結する現象が起きてきています。関係が希薄になってきているのは、檀家への法施の機会が減ってきていることなどの理由だけでなく、宗教感の変化や、不景気の影響も大きいと言われております。しかし不景気が主要因とすれば、収入の減少は深刻な問題ではなく、景気が好転するまでの一過性の問題と捉えることができますが、残念なことにそう考えている人は少数派で、識者で多いのは、この傾向はこのまま続き、これからさらに厳しくなる寺院経済のプロローグではないかと言われています。

（二）資金の保全と運用の大切さ

ますます厳しさを増す寺院経済で、ご住職は「法人の経営責任者」としてその資産を安全に管理し、かつその資産の上手な運用を通じて資産を増加させていくことが求められているのです。一昔前のように「布教・教化」活動には全力を挙げるが、荒れ寺になっているということでは許されない時代になってきております。檀信徒から預かった浄財、それが金融資産に形を変えている場合が多いのですが、それをご自分の才覚で増やしていくこと、それは決して不必要なことではなく、法人の管理責任者としての責務だといっても過言ではないと思います。このペイオフが否応なく始まりますが、この機会にぜひもう一度お寺にとっての金融資産の保全と運用とについて再考していただきたいと思います。

（三）ペイオフ導入の背景

ペイオフは、国による金融機関の保障の終焉を意味しています。それは昨今の国際経済の中で、競争の激化が背景にあるのです。グローバル化という言葉で表されていますが、国境のない経済の中では、ありとあらゆるものの競争が増してきています。とりわけ金融機関ではそれが顕著で、護送船団方式の傷を舐め合い、臭いものに蓋をする関係では、国内だけならともかくも世界を相手にしては生き残れないところに来てしまっているのです。

ここで大切なことは、これは他人事ではないということです。金融機関は外資系だらけ、車のメーカの社長も外人、箱根の老舗旅館にも外資が、ということは例外ではなく、生きている人、会社、法人すべてに「競争」が及んできており、お寺だけが果たしてこれら「生き残りをかけた社会」に無縁でいつまでもいられる、という保障はどこにもないのです。

知って得する

ビワの家庭療法

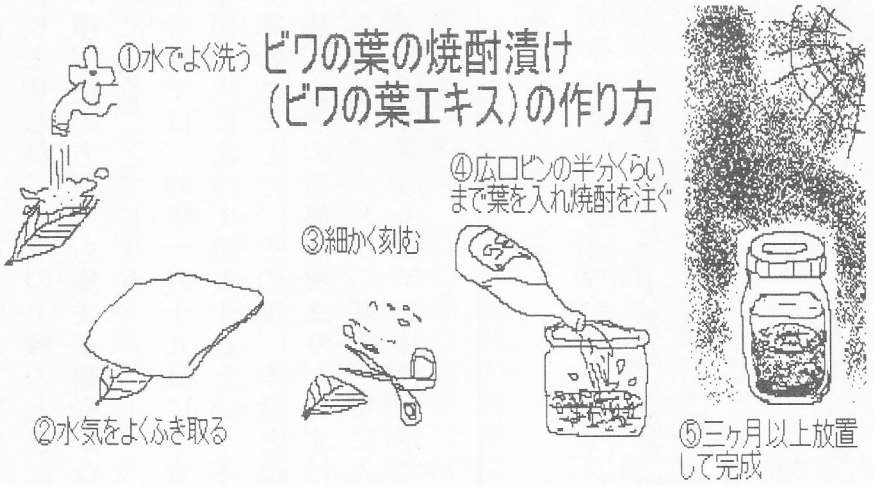
今年の夏は例年以上の酷暑だと言われ、水不足も心配されていましたが、ようやく暑さも和らいで、秋の気配がしてまいりました。夏前に梅酒を漬けた方にとってはそろそろ飲み頃かもしれませんね。さて今回は梅酒ではなく、同じように焼酎漬けにしたりして使われるビワの話をしたいと思います。

ビワはバラ科の植物でモモやリンゴの仲間です。初夏には橙色の甘い実を付けますが、実ばかりではなく種や葉にも薬効成分があるため、家庭療法に広く用いられています。

ビワは仏教とも縁があり、仏典の「大般涅槃経」の中でビワの木は「大薬王樹」、葉は「無憂扇」と呼ばれ、大変優れた薬効があると伝えられ、日本でも鑑真和尚が中国から伝えたとされるビワの葉療法が、七百三十年に光明皇后が創設した施薬院でも施されるなど、ビワの葉は古くから利用されていました。そして、お寺の僧侶が境内にビワの木を植えて村人の治療に用いている内に一般に広まったようです。こうして生まれた

と考えられる「ビワの木を庭に植えるな」という言葉は、ビワを植えるとその薬効を知っている病人が大勢集まってしまって縁起が悪いという、迷信ながらビワの万能薬としての有効性を示すものと言えます。

最近では医学的にもビワの有効性が証明されています。昭和の初めに札幌鉄道病院の福島鐵雄博士はビワの葉療法の即効性と確実性、万病に奏効することを述べています。昭和十二年頃大阪大学の安田寛之博士は、動物実験でビワの葉エキスの血液浄化作用を実証しました。また、ビワの薬効成分の一つアミグダリンと呼ばれるビタミンB17は抗ガン作用があり、特に種には葉の千三百倍のアミグダリンが含まれていることがわかっています。アミグダリンはガン細胞中に多量に含まれるベータ・グルコシターゼという酵素によって加水分解され、青酸とベンツアルデヒドとが遊離し、ガン細胞はこの二つの毒素の相乗効果によって破壊されるのです。正常な細胞にはロータネーゼという酵素があって両毒素が無害な物質に変えられるため影響を受けません。さらに、アミグダリンが分解されてできる安息香酸は抗リウマチ、殺菌、鎮痛作用に効果を発揮しますが、特に沈痛作用は絶大で末期ガンの痛みを和らげるほどです。



（次ページへ続く）

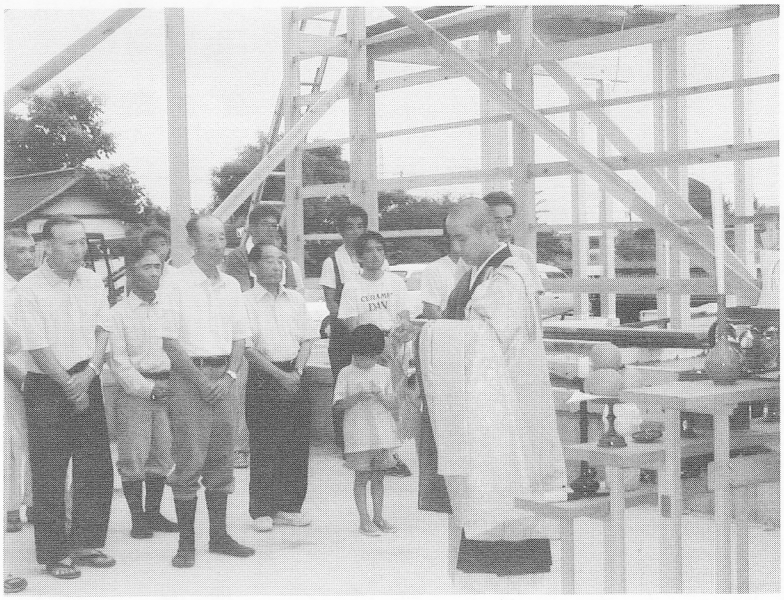
ビワを用いた家庭療法は簡単ですが、かなりの効果が期待できます。いくつか紹介してみましょう。

①金地院療法…臨済宗妙心寺派の金地院（引佐郡細江町・河野文英住職）の故河野大圭氏（現住職の祖父）が行った療法で難病に苦しむ二十万人以上の人々を救ったと言われています。緑の濃い厚手の生葉の光沢のある表面を焦げない程度に火であぶり、二枚合わせて十回ほど擦り合わせてから両手に一枚ずつ持ち、熱い内に皮膚に直接密着させて押し揉むようにして撫でます。撫でる場所は先ず腹部（丹田とみぞおちを入念に）を六～七分、次いで背、肩、腰、尻まで全部で十分程度、最後に患部です。

②ビワの葉の焼酎漬け…最も一般的なビワの葉エキス。大きくて厚手の年季の入った葉（大寒の頃採取するのが最も良い）をよく洗い水気をふき取り細かく刻み、三十五度の焼酎（アルコール度数の高い方がエキスの抽出能力が高い）に漬け込んで三ヶ月以上放置する。できたエキスは薄めて飲んでも塗っても湿布しても良い。葉を湿布しても良い。痛み、痒み、腫れ、胃のもたれなどに効きます。

臨済宗妙心寺派 西福寺様で上棟式

浜北市平口



去る七月二十九日、浜北市平口の西福寺様（臨済宗妙心寺派・安藤宗明住職）において、位牌堂の上棟式が行われました。

上棟の工事のときから上棟式当日まで、天候に恵まれて雨は全く降らず、工事も式典も万事順調に行われました。式典には住職を始め、世話人の方が二十名、天峰建設の社長と棟梁が出席し、関係者のみの落ち着いた雰囲気の中で、上棟を祝い、工事の無事を祈りました。まだ本堂の工事は着手しておりませんが、本堂の上棟のときには、一般の檀信徒の方たちも集まる賑やかな上棟式になることでしょう。

西福寺様では、昨年一月十九日に本堂と位牌堂が放火によって焼失するという不幸に見舞われました。その後、本堂と位牌堂の再建、山門の新築が決まり、先ずは位牌堂から着手し、六月から基礎工事に入りました。完成は平成十五年三月の予定です。

編集後記

先日ある住職から紙面の表現についてアドバイスを頂きました。大変ありがたいことだと思い、早速今回より取り入れさせていただきました。

「こんな記事を載せてはどうか」とか、「この表現はどうか」など、今後の記事に役立てたいと思いますので、ご意見ご感想を頂ければ幸いです。

また、施工中の現場や既に完成したお寺、工場の見学、お見積や設計のご相談もお気軽にお申し付け下さい。